

平成27年度 第1回 英数特科クラス入試 入学試験問題
第1回 特別進学クラス入試

国 語

氏 名	
-----	--

受験上の注意

1. 試験時間は、50分間です。
2. 答えを書き始める前に、問題用紙には氏名を、解答用紙には座席番号・受験番号・氏名を書いてください。
3. 字数制限のある問いでは、句読点や符号（ 、 。 「 」 など）も一字と数えます。
4. もし、読みにくいところがあったら、静かに手を上げて、試験監督の先生に聞いてください。
5. もし、解答用紙が破れたときは、静かに手を上げて、試験監督の先生に知らせてください。
6. もし、気分が悪くなったときは、静かに手を上げて、試験監督の先生に知らせてください。
7. 問題を解き終わっても、途中退室はできません。

一、次の各問いに答えなさい。

問一 次の各文の――部のカタカナを漢字に直しなさい。

- ① 推せん図書がイチラン表に出ている。
- ② 土地のバイバイ契約けいやくを交わす。
- ③ 科学研究でギョウセキをあげる。
- ④ 母との大切な約束をハたす。
- ⑤ ヨブんな紙はありませんか。

問二 次の――部のカタカナと同じ漢字を用いる熟語を、それぞれ後のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

- ① 父はせっかちなショウ分だ。
- ア 生類 イ 軽傷 ウ 氣象 エ 相性
- ② ヨウ姿が整っている。
- ア 内容 イ 重要 ウ 養育 エ 様子
- ③ 国の存ボウをかけて戦う。
- ア 備忘 イ 亡命 ウ 防衛 エ 希望

- ④ 重責をニナう。
- ア 探知 イ 反物 ウ 単独 エ 加担
- ⑤ カイ活なテンポの音楽だ。
- ア 快方 イ 開通 ウ 司会 エ 改良

問三 次の――部と同じ意味・用法のものを、それぞれ後のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

- ① 僕はもう過ちは繰り返すまい。
- ア めったにそんなことはあるまい。
- イ もう二度と何も言うまい。
- ウ あのチームに負けることはあるまい。
- エ だれにも予測はできまい。
- ② 夜になると、星がきれいにかがやいていた。
- ア もうすっかりと日が暮れてしまった。
- イ 夕飯を食べた後、兄と姉としりとりをした。
- ウ 本を開くと、未知の世界が広がっていた。
- エ さくらの花が満開になるころ、中学生となる。

③ ブドウの実が豊かにみのった。

ア ついに別れの時がきてしまった。

イ すっかり春めいてきたのに、風は寒い。

ウ 子どもといっしょに遊んでいる。

エ 正直に話してくれてありがとう。

④ 大きな風船が今にも割れそうだ。

ア 明日は全国的に晴れるそうだ。

イ あの森は親子のタヌキが出るそうだ。

ウ このぶんでは朝から雪になりそうだ。

エ ドイツは車で有名だそうだ。

⑤ 星が宝石のように光っている。

ア 彼のように優しい人が好きだ。

イ 彼女はリスのようにはね回った。

ウ やつと学校に行けるようになった。

エ 父を起こさないように静かにする。

二、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

① 十で神童、十五で才子、二十過ぎればただの人^aということわざがある。幼いときずば抜けて利発であつたのが、少したつと輝きをなくし、成人するころには、普通の平凡な人間になってしまう。年とともに天分が失われていくさまを述べたものだ。もちろん、神童のまわりの人たちの言うことではなく、無縁のもののやつかみ半分の皮肉が見えかくれする。いい気味だというほどはつきりしていないが、神童がただの人になっていくのを、おもしろい、と見ている。

② 十で神童^②、と言うが、それまでは何なのか。そんなことを問題にするものもないから天下泰平である。生まれてからの十年はいつたい何なのか。昔から、幼い子は人間として扱っていなかったことを暗示している。生まれて当分の間、子どもは、何もわからず、何もできない。勝手にそう決めてしまっていた。これが大違いであることは、文化、学問の進歩した現在も一般に理解されていない。実際はその逆で、子どもは生まれて十年間に、その後の一生かかってもできないことをやりとげる。少なくとも天分、能力は生誕直後のしばらくがもつとも高く、年齢が進むにつれてその潜在的能力を減らしていく。多くの子は十になる前に、ただの子になってしまっている。十歳で神童と言われるのは、何かの好運によって天分そう失を免れたのである。神童もやがて能力でいげんの法則にしたがつて天分を失って凡人になるが、奇跡的にこの法則にからめ捕られなかったのが、天才ということになる。才能でいげんの法則を超越できれば、すべての子が天才である。生まれたばかりの子が何もわからず、何もできないように考えられるのは、すべての子が未熟児で生まれてくるからである。いかにも無為無能と見えるが、その実、潜在的能力は最高の状態にあると想像される。現代の学問はこれを説明することができないでいる。すべての子が天才であることがはつきりすれば、この世は一変するであろう。一般に、生まれてくる子にいろいろなことを教えて一人前の人間にするように考えているけれども、実は子のもてる才能能力を寄つてたかつてつぶしてしまっているようにも思われる。すべての子が神童の可能性をもって生まれてくるのに、本当に神童になるのはごく限られた子だけである。

子どもは能力を内蔵しているが、これを引き出す外からの力が必要である。まわりはそれに気づかず、ほうっておくから、潜在的能力はやがて不必要の^④として消滅するのである。能力は闇から闇に葬られる。すべての天分は年とともに減っていくから、天才は若いうちに表れる。普通の人間が七十歳を超えて天才であるというのは考えにくい。すぐれた詩人もインスピレーションが得られるのは三十歳くらい

だと言われる。科学技術の発見、発明なども、若いときになされるのが普通である。若さが重要なのは、生得的な才能は年齢が低いほど豊かであることを考えれば理解できる。天才の多くが童心を失わないのはむしろ偶然であるが、すべての子が天才であることを考慮すれば、むしろ当たり前のことになる。

「はじめにコトバありき」と言われる。人間にとって、いのちについて大切なことはことばであろう。しかし、ことばをもって生まれてくる子はひとりもない。いかなることばであつても習得できる万能言語能力をもっている。日本人の両親から生まれた子でも英語だけ聞かせていけば、英語がわかり話せるようになる。ほかのどんなことばでも、はじめのことばとして聞かせれば、そのことばをしっかりと身につける。

昔の母親はたいい「子どもは自然にことばを覚える」と思っていたようだ。さすがに今はそういうことを口にする人は少なくなった。しかし、子どもが、どうしてことばを身につけるのか、はつきりしないのは今も変わるところがない。つまり、はつきりことばを教えらる大人がまわりにいなくても、子どもは自力で、はじめのことばを習得する。要するに学ぶのではなく、自分で「創る」のである。

子どもの言語習得に関して注目すべき逸話がある。と言つても私がずっと以前にイギリスの本で読んだ話で、詳しい固有名詞などはすべて忘れてしまっている。本来なら書くべきではないが、要点ははつきり覚えているので、あえてそれを紹介したい。

その昔、ヨーロッパのある国で国王が妙なことを考えた。人間がいろいろ違ったことばを話すのは、子どものときにまわりが教えるからで、もし何も教えなければ、子どもは神のことばを話すようになるはずだ、と言うのである。実験をした。何人もの新生児を集め、手厚い保育を与える一方、一切、ことばを聞かせてはいけなと命じた。その結果、子どもたちは次々と亡くなり生き残るものはなかった、という。現代においてこれを荒唐無稽と一笑に付することはできないのではないか。

かつての母親は、さきにも述べたが「子どもは自然にことばを覚える」と考えた。今はそんなことはないが、なお、子どもがことばを覚えることの不思議さははつきり理解している向きはきわめて少ないだろう。それどころか言語学さえ幼児の言語習得について決定的な解明をなし得ていない。一般がわからないのはむしろ当然である。

ことばをまったく知らずに生まれてくるのに、三年もすると、例外なく、ことばがわかり、使えるようになっていく。驚くべきことだ。その間にまわりでしつかりことばを教えることがないのである。

I 先生はいる。母親である。しかし、「返事をしない子どもにモノを言うの、独り言を言っているみたい」などという先生である。

II 生まれてくる子にことばを教える人はいないと言つてよいのである。

III 子どもはことばを身につけなくてはならない。どういうことかと言うと「学ぶ」のではなく「創る」のである。子どもは「はじめのことば」を教えてもらうのではなく、自力・独力で、創り上げる。創造といつてよいのである。われわれは、こういうことを知らずに子どものことば、一般を考えてきたというおかしなことになるのである。

ひとつひとつのことば、単語はまだいくらか教えてもらう部分があるけれども、ことばを使うときのルール、文法については、まったくほかから教わることなく、めいめいが三年くらいの間に創り上げてしまうのである。これをいわゆる頭のいい子だけでなく、ほとんどすべての子どもが、やつてのけて知らん顔をしているのである。それで大人たちも知らぬ顔をしてきた。この文法はその子の心の核のようなもので、昔の人が「三つ児の魂」といったものとの結びつきが問題にされてよいところである。

ひとりひとりの子どもは、断片的なことばを聞いて、それをそのまま覚えるだけではなく、部分的なことばをもとに、文法というシステムを創り上げる。ほとんど神業といつてよい。人はこのことを自覚することなく一生を終える。自覚しないのは自分の文法を本人では意識できないからである。いったんできた文法は死ぬまでもち続ける。その点でも「三つ児の魂、百まで」に通じるところがある。ほかの人の言つたことを「おかしい」「違っている」などと感ずるのは、このかくれた文法の送っている合図なのである。

外国語の勉強でも文法をマスターするのはたいへんだが、母国語について、すべての子が、自分で文法を創り上げているというのは驚異的である。つまり、人間は生まれながらにしてすばらしい創造力をもっている証拠である。それによつてことばを身につけられるようになっているのは自然の摂理である。

そのことに気づかず育てられるから、どんどん能力を失っていき、十で神童……ということになる。生まれて数年の間、人間は天才的創造力に恵まれている。

(外山 滋比古 『忘れる「力」』による 問題作成のために本文を一部変更・省略したところがあります。)

- ※1 利発……………かしこいこと。
- ※2 天分……………天から分け与えられた性質・才能。
- ※3 ていげん……………次第に減少すること。
- ※4 インスピレーション…突然ひらめく考え。
- ※5 荒唐無稽……………言動がでたらめで、まったく現実味がないこと。

問一 ――部①「神童」とありますが、筆者は「神童」をどのような子どもであると考えていますか。それを説明した次の文の□に当てはまることばを、本文中からぬき出しなさい。

天分の□□□□□□□(七字)子ども。

問二 ――部a「やつかみ半分の皮肉」・b「逸話」の本文中での意味として適当なものを、それぞれ後のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

a「やつかみ半分の皮肉」……………

ア	面倒くささから生じる意地悪
イ	あせりから生じるはやい決断
ウ	くやしさから生じる言いわけ
エ	うらやましさから生じる非難

b「逸話」……………

ア	子どもの教育に関する話
イ	語りつがれてきている話
ウ	あまり知られていない話
エ	知っておくべき重要な話

問三 ――部②「それまでは何なのか」とありますが、筆者は「それまで」の人間はどういう状態であると想像していますか。それを説明した次の文の□に当てはまることばを、それぞれ本文中からぬき出しなさい。

一般に、生まれたての子どもはみな未熟児であるため、自分では何もできない無為□□(二字)な存在とみなしてしまうが、実際は、その体に秘められた力は□□(二字)の状態であると想像している。

問四 ――部③「その逆」とありますが、この内容を説明したものとして適当なものを、次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 昔から、幼い子どもを人間として扱っていなかったことを暗示しているということ。
- イ 文化の進歩した現在でも、子どもは正確には理解されていないと思われていること。
- ウ 子どもは、何もわからず、何もできないと決め込むことが大違いであるということ。
- エ 年齢が進むにつれ、子どもはその体に秘めた潜在的な能力を減らしていくということ。

問五 — 部④「能力は闇から闇に葬られる」とはどういうことですか。それを説明した次の文の□に当てはまることばを、それぞれ本文中からぬき出しなさい。

もともと子どもは様々な□□□□(四字)を内蔵しているが、そのことに周りの大人が気づかず、

□□□□□□(六字)ので、その内蔵された力自体が、□□□□(三字)なものとして消滅してしまうこと。

問六 — 部⑤「ことばをもって生まれてくる子はひとりもない」とありますが、ここで筆者が述べようとしていることとして適当なものを、次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

ア 生まれて当分の間、子どもは、何もわからず、何もできないであろうということ。
イ 我々人間にとって、いのちについて大切なのは、ことばであるだろうということ。
ウ 子どもは、いかなることばでも習得できる万能言語能力をもっているということ。
エ 子どもが、どうしてことばを身につけるのかは、今もはっきりしないということ。

問七

I
Ⅱ
Ⅲ

 に当てはまることばとして適当なものを、それぞれ次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二回以上選ぶことはできません。

ア つまり イ それでも ウ では エ もちろん

問八 — 部⑥「創造といってよいのである」とありますが、その理由を説明した次の文の□に当てはまることばを、それぞれ本文中からぬき出しなさい。

ひとりひとりの子どもは、周りの大人から聞いた部分的、□□□□(二字)的なことばをそのまま□□□□(三字)だけではなく、それらのことばをもとに、ことばを使うときの□□□□(三字)を創るから。

問九 — 部⑦「三つ児の魂、百まで」とありますが、このことわざで筆者が表現したかったことを説明した次の文の□に当てはまることばを、それぞれ本文中からぬき出しなさい。

子どもは、死ぬまでもち続ける□□□□(五字)を、まったくほかから□□□□(三字)ことなく、生まれてから三年くらいの間、□□□□(四字)てしまうということ。

問十 筆者の考えとして正しいものを、次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

ア 現代の子どもはみな、生まれながら内蔵されている能力を大人の教育によって引き出されるので、神童となることができる。
イ 言語学が発達した現代では、何もわからない子どもが自然にことばを覚えることの不思議さは、はっきりと解明されている。
ウ 子どもの潜在的能力は生まれて間もない頃が最も高いが、多くの場合年齢が進むにつれその能力を失い、やがて凡人となる。
エ 幼少期は生まれながらの潜在的能力が最も高い状態と考えられているので、すべての子どもが神童であると考えられている。

三、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

第四小学校では三年生から学級委員というものがあった。各クラス三名ずつが学期の初めに選出される。得票数の多い方から委員長、副委員長、書記となった。委員長の主たる仕事は学級会の司会であり、授業の初めと終わりに「起立」「気を付け」「礼」「着席」の号令をかける。他に月一度、全校児童会へクラス代表として出席した。

ヒコベエは学級委員長になりたくて仕方なかった。これになることが自分の力の証^{あかし}と思っていた。一学期の初めに選ばれなかったのは転校生だから仕方なかったとしても、二学期に選出されなかったのは落胆^{らくたん}であった。勉強の方は申し分なかったが、藤田君に睨^{にら}まれていたこともあり周囲に融^とけこんでいなかったのである。友達とほとんどしゃべらないのだから人望がないのも当然だった。

三学期の始まる数日前から、ヒコベエは学級委員選挙について考えていた。クラスを平定したのだから、今度こそ選ばれる確信があった。だが、一つだけ^①どうしても解決のつかない問題があった。三学期の始業式を明日に控^{ひか}えた日曜日、朝食後に牛乳瓶^{びん}の最後の三分の一を飲みながら、今日こそ親に聞いてみよう^②と決心した。その頃^{ころ}ヒコベエの家では、子供たちの栄養補給のため毎日、保証牛乳というメーカーの牛乳を一本（百八十ミリリットル）だけとっていた。飲む順番はジャンケンで決められた。少し前までは牛乳の底面から表面までの高さを大體三等分し、妹のサッコに上部三分の一を飲ましていたのだが、この頃までにはサッコも、上部三分の一がくびれている分だけ量が少ないことに気付いたため、三人でジャンケンということになっていた。ヒコベエは最後の三分の一を最後の一滴^{てき}まで飲み干^ぬしてから、懸案^{けんあん}の問題を切り出した。

「明日、学級委員の選挙があるんだけど、自分で自分の名を書いていいのかな」

父と母はヒコベエの顔を見ると、ほとんど一緒に、

「もちろんいいよ」

と言った。お兄ちゃんが、

「何だヒコベエ、あんなものになりたいのか」

と軽べつするように言った。ヒコベエは口をとがらせて言った。

「だって一度もなかったことないんだもん」

「俺^{おれ}なんてちゃんと一学期に学級委員をやったよ。やりたくなかったのに選ばれちゃったから仕方なくやっただけさ。あんなもんやってると、勉強時間もとれなくなるよ」

^②母が助け船を出した。

「お前は一カ月後に中学入試を控^{ひか}えているからそうだろうけど、ヒコベエは違^{ちが}うよ。一度やると色々勉強になっていいと思うけどね、お母さんは」

ヒコベエが言った。

「本当はねえ、困っているのはねえ、僕が自分の名を書く、開票の結果、クラス全員五十名が僕に投票したことになりそうなんだよ。僕が自分の名を書いたことがバレちゃうということなんだよ」

ヒコベエの胸の中では、学級委員になりたいという強^{つよ}れつな欲望と、その気持ちを友達には絶対に知られたくないという羞恥^{※2 しゆうち}が、統御^{※3 とうぎよ}できないほどに葛藤^{かつとう}していたのである。母が不思議そうに言った。

「バレてどこが悪いのよ。なりたければ自分の名を書くの、当たり前じゃない。自分の名を書いちゃいけない選挙なんて、世界中どこにもありやしないわよ」

父が口を開いた。

「本当に五十票満票になりそうなのか」

「多分なと思う」

「それなら誰かの名を書いておけば。四十九票でも当選するからな。自分の名を書くのはちょっと、というヒコベエの気持ちはわかるよ」

^④「お父さんまでそんな馬鹿^{ばか}なこと言うの。男^{おとこ}っていうのは本当に見栄^{みえ}っぱりなんだから」

母が呆^{あき}れたように首をふった。いつも通り、名より実をとる母と、実より名をとる父の意見が分かれたのであった。ヒコベエは内心、父に従い自分の名は書くまいと決めた。

翌日の投票では予測通り、ヒコベエが四十九票の得票で選ばれた。この時ほど安堵したことはなかった。帰宅するや、ヒコベエは意気揚々と母に言った。

「学級委員長に選ばれたよ。やっぱ四十九票だったよ。お母さんの言うことを聞いていたら大恥をかく所だったよ」
母はうれしそうに微笑んでから言った。

「何言ってるの。相変わらずヒコベエは単純だねえ。お前の名を書かなかったのが一人だけいたけど、それがヒコベエだということを知っているのはお前だけだよ」

ヒコベエはなるほどと思った。役所から帰った父に母の話をした。父は面白がって言った。

「お母さんにしてはいい所に気付いたなあ。でもね、五十と四十九は全然違うんだよ。四十九人の場合は確かにお母さんの言う通りだが、満票だと確実にヒコベエが自分に投票したことが分かってしまう。だからこの一票の差は大きいんだよ。ヒコベエの感じた通り、黒と灰色は全然違うんだよ」

ヒコベエは、学級委員長になったことが心の底からうれしくなった。

全校児童会は月に一度、昼休みに開かれ、この様子は学校中のスピーカーから実況放送された。ヒコベエは大張り切りだった。委員になつてすぐの全校児童会で、議長の六年生が最後に学校からの注意を伝えた。

「皆さん、この学校には知つての通り、校舎を貫いて南から北に抜ける通路が二つあります。この通路にはそれぞれ二カ所に渡り廊下として踏み板がいくつか並べてあります。最近、通路を歩く時に渡り廊下の踏み板を土足で踏んで行く人が見受けられます。踏み板が汚れ、結局はそのそばの廊下も汚れてしまいます。これからは踏み板は跳び越えるか、いくつか並べられた踏み板には所々に二十センチほどの隙間がとつてありますから、そこを歩くかのどちらかにして下さい。この注意を学級に帰ったら必ず伝えて徹底して下さい。質問は何かありますか」

ヒコベエはこれを聞いてすぐに挙手をした。普段は発言などせず上級生の言うことを黙って聞いているだけの三年生が手を挙げたのでびっくりしたのか、議長はヒコベエの顔を怪訝そうに見つめてから、窓際に立っていた教頭先生をちらつと見た。つるつる頭に赤ら顔の教頭先生がうなずくのを確かめてから、議長はヒコベエを怪しむような目付きで指名した。前方の校内放送用マイクロフォンまで行ったヒコ

ベエは、恐ろしいほどの高音で機関銃のようにしゃべり始めた。

「踏み板を踏んではいけないといっても、通路に置いてある板を踏まないなんて無理です。第一、一年生なんかは小さいから、幅五十センチもある踏み板を跳び越えられるとは限りません。それに大勢の生徒が通路を通る時、踏み板の二十センチくらいしかない隙間に集まったら危険です。誰かがつまずいたら折り重なっちゃいます。そんなつまらない規則を作るより、踏み板は土足でどしどし乗っかってよいことにした方がいいんじゃないかと思います。踏み板やその回りの廊下の汚れは毎日、午前の授業の終わりと放課後に拭き掃除をすればよいだけのことだと思います」

ものの十秒ほどのうちに、甲高い声でこれだけのことをしゃべりまくったのである。しゃべり終わったヒコベエが席に戻る時、教頭先生が笑いながら頭をなでてくれた。議長は、

「もう他にないですか。では全校児童会は終わります」

と言った。我ながらすばらしい意見とヒコベエは思っていたものの、完全に無視されたのであった。

その日の夕食で一部始終を両親に話し、討論にもならず却下されたことを悲憤慷慨したら、父が同情するように言った。

「確かにヒコベエの言うことは一理はある。少なくとも独創的だ。全校児童会で一番下の三年生だからといって軽視するのはひどい。恐らく議長は優等生で、学校側の決めたことに反論するなどという選択肢を持たなかったのだろう。権威に反抗することは勇気のいることだ。ヒコベエ、よくやった。意見は通らなかったが勇気と独創を示したからそれでよい。全校放送されていたからそう感じた者も多くいるはずだよ」

横で聞いていた一年生のサッコが口を挟んだ。

「あんまり高い声であんまり速くしゃべったから、誰が何を言ってるのかゼンゼン分からなかったよ。速まわしのテープのような音がスピーカーから流れただけだったよ。サッコはもしかしたらヒコベエかと思ったけどさ。クラスのみんなが途中から笑い出しちゃったんだから。ああ恥ずかしかった」

(藤原 正彦 『ヒコベエ』による 問題作成のために本文を一部変更・省略したところがあります。)

※１ 懸案……………問題とされながらもまだ解決がつかないでいること。

※2 羞恥……………はずかしく思う気持ち。

※ 3 統御……………全体をまとめること。

※4 悲憤慷慨……思うようにならない世の中や自分の運命などに対して、悲しみいきどおること。

問一——部①「どうしても解決のつかない問題」とはどういう問題ですか。本文中のことばを用いて二十五字以上三十五字以内で答えな
よう。

問二 || 部 a 「口をとがらせて」・ b 「怪訝そうに」の本文中での意味として適当なものを、それぞれ後のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

a
「口をとがらせて」
……

ア	悲しそうに
イ	不満そうに
ウ	楽しそうに
エ	心配そうに

b 「怪訝そうに」
.....

ア 合点がいかず、軽べつして
イ かわいらしく、おさなげに
ウ 納得できず、不思議そうに
エ 理解ができず、おどろいて

問三 部②「母が助け船を出した」とありますが、その時の状況を説明した次の文の□に当てはまることばを、それぞれ本文中からぬき出しなさい。

[illegible]

「何だ、
 イ
 (三字) ものになりたいのか」と、「ヒコベエ」を軽べつするように言った。そう言われては

[illegible]

学級委員を務める良さを述べた。

問四 — 部③「母が不思議そうに言った」とありますが、その時「母」が「不思議」に思ったこととして適当なものを、次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

ア：学級委員はみんなが選ばれるものであるが、「ヒコベエ」は自分の名を書いて投票することに否定的な態度であること。

イ 学級委員は「お兄ちゃん」が仕方なく引き受けて務めたような無意味な仕事であるのに、「ヒコベエ」が立候補したこと。

選挙では一票でも多く獲得したいものなのに、「ヒコベエ」は投票の際に、自分の名は絶対に書かないと言い出したこと。

工 選挙で立候補者が自分の名を書くことは当たり前なのに、「ヒコベエ」は自分の名を書くか書かないかで悩んでいること。

問五 — 部④「母が呆れたように首をふった」とありますが、その時「母」が何に「呆れた」のかを説明したものとして適当なものを、次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 選挙で当選したいなら投票時に自分の名を書くべきなのに、「ヒコベエ」は学級委員になりたいことを級友たちに知られたくないから、書かない方がよいのではないかと悩んでいること。
- イ 選挙で当選したいと「ヒコベエ」は思っているに違いないのに「お父さん」はそのことに気づかず、投票時に自分の名を書きたくないという彼の発言をそのまま真に受けてしまったこと。
- ウ 選挙で当選するなどというまったく面白味もないことに「ヒコベエ」は夢中になっているうえに、「お父さん」も「ヒコベエ」のやる気を後押しするような発言をしてしまっていること。
- エ 選挙で当選するには一票でも多く獲得するために自らに投票するのが当然なのだが、「お父さん」も「ヒコベエ」も自らが持つ欲望を級友にさとられないことが大事だと思っていること。

問六 — 部⑤「ヒコベエが四十九票の得票で選ばれた」とありますが、この時の「ヒコベエ」の気持ちとして、ふさわしくないものを、次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 自分が自分に投票したことが周りのみんなにバレなかったという安堵。
- イ 自分が予想したとおり、四十九人の級友が自分に投票したという喜び。
- ウ 以前からぜひなりたいたいと思っていた学級委員になれたといううれしさ。
- エ 学級委員になりたいという欲望が級友たちにバレなかったという安心。

問七 — 部⑥「議長はヒコベエを怪しむような目付きで指名した」とありますが、なぜ「議長」は「ヒコベエ」を「怪しむような目付きで指名した」のですか。本文中のことばを用いて答えなさい。

問八 — 部⑦「機関銃のように」とありますが、この表現を説明したものとして適当なものを、次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 「議長」が自分を無視するのを許せず、言い負かしてやろうとする「ヒコベエ」の気持ちをたとえの技法で説明している。
- イ 小学三年生の意見など聞き入れない上級生に対して、意見を言おうとする「ヒコベエ」の気持ちを倒置法で強調している。
- ウ 「ヒコベエ」が話した内容の多さと、「ものの十秒ほどのうちに」言い切る速さを、「機関銃」にたとえて表現している。
- エ 擬人法を用いて、「ヒコベエ」の声があまりにも高音で全校児童が聞き取れる状態の放送ではなかったことを説明している。

問九 ―部⑧「速まわしのテープのような音」とありますが、「ヒコベエ」の声がこのようになってしまったのはなぜですか。それを説明した次の文の□に当てはまることばを、それぞれ本文中からぬき出しなさい。

「ヒコベエ」は学級委員になりたいという□□□□□□□□□□(六字)を持っていたので、学級委員としてはじめての

□□□□□□□□□□(五字)への参加に□□□□□□□□□□(五字)で、話す時に力が入ってしまったから。

問十 本文から読み取れる「ヒコベエ」の人物像として適当なものを、次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

ア 選挙で当選するためには自分の名前を書いた方がよいという常識や、小学一年生のことを思いやって上級生の意見に真っ向から反対するという度胸の良さを持った人物。

イ 周りの級友に自分の欲望をさとらせないように考えをめぐらすことのできる思考力や、自分がいだいた意見を全校児童会で発表するような思い切りの良さを持った人物。

ウ 何をしてでも学級委員として活躍しようとする自尊心の強さと、全校児童会では上級生を差し置いてでも自分が思いついた意見を発表しようとする強引さを持った人物。

エ 妹には少ししか牛乳を与えず自分だけたくさん飲もうとする計算高さや、どんな細かいことでも家族のみんなで話し合いを持つようにする協調性を持った人物。

国 語

(第一回英数特科クラス入試
第二回特別進学クラス入試)

一

座席番号
受験番号
氏 名
評 点

問一	
④	①
たす	
⑤	②
	③

問二	
④	①
⑤	②
	③

問三	
④	①
⑤	②
	③

二

問一

問二
a
b

問三
ア
イ

問四

問五	
ウ	ア
	イ

問六

問七
I
II
III

問八
ア
イ
ウ

--

三

問九	
ウ	ア
	イ

--

問一		
25		
35		

問二
a
b

問三		
ウ	イ	ア

問四
問五
問六

問七

問八

問九	
イ	ア
ウ	

問十

--